

東村山稲門会ニュース 第17号

H10年8月8日 発行
発行責任者、大西 幸夫
編集局 塩見 之一
田口 政澄
小亀 輝雄
事務局、0423-94-6951

会からのお知らせ

◎ 9月定例会の案内

日時：9月5日(土) 15.00～16.30

場所：ふるさと歴史館 視聴覚室

演題：『傘の歴史よもやま話』

講師：伊藤 友巳氏、S51年 政経学部卒 (会員)

◎ 定例役員会

日時：9月5日(土) 13.30～14.00 発送準備 (有志による)

14.00～15.00 役員会

場所：上記定例会と同じ

なお、一般会員の方も時間の都合のつく方は気楽にご参加ください

◎ 7月の講演会内容要旨

『ODA活動と中国事情』 成田 延雄氏 S28年 理工学部卒 (会員)

日本の対外援助のあり方については現下日本経済が未曾有の混乱にあって、種々議論のあるところですが、国際社会の中で発展途上国、アジア諸国等への援助、技術協力はある程度やむを得ないものと考えられます。成田さんの講演は海外協力の全体像、中国企業の事情等について、実体験を踏まえた具体的事例を詳細に話して頂きました。

以下レジメ項目をあげると

1. 政府開発援助 (ODA) とは
2. ODAの1998年度予算 (世界的に削減傾向)
3. 日本の援助の仕組み
4. ①中国は日本の専門家に何を求めているか
②中国国営企業の悩み
③企業経営幹部と中間管理職者の意識の違い

(三宅、記)

◎ 他会議等への参加模様

(1) 早稲田大学校友会代議員会

日時：7月3日(金) 場所：大隈講堂 出席：東京、各地域および職域稲門会

当会からの出席、久世、三宅、木谷および総長指名の身分で小亀、井原

内容：1、役員選任 (幹事、代表幹事、常任幹事、会計監事)

2、校友会会則等の一部改定

懇親会

(久世、記)

(2) 三多摩稲門会連合会

日時：6月27日(土) 場所：国分寺駅ビル、Lホール

主宰当番：国分寺、小金井両稲門会 当会からの出席者：久世、久保

約170名が参集し、第1部は男性合唱 (黒人霊歌ほか) および平野啓子さんの語り (蜘蛛の糸)、第2部、懇親会は奥島総長の祝辞と地元「小金井貫井ばやし」の中、和やかに交流が行われました。

なお、来年は八王子と日野稲門会が主宰当番と決まりました。

(久世、記)

◎ 会員動向

☆新入会員紹介 鈴木 国夫さん 住所：東村山市秋津町2-12-16

電話：042-394-2052

☆会員の住所変更 森田 光雄さん 大阪から戻ってきました

旧住所：茨木市中村町17-17 (留守宅) 萩山町4-7-10

新住所：練馬区中村南2-7-18-207 (会員として継続)

電話：03-3970-4857

- ◎ 6月27日開催の早稲田大学商議員会 (前号16号にてお知らせ済み) における、奥島総長の講演内容を添付致します。

同好会だより

着順掲載

絵画同好会

海岸の人混みがまだマバラな7月なかばに鵜沼のクルーザー泊地、ヨット・サーフボードなどをスケッチして来ました。

夏の海岸はカラフルなところが狙い目ですが強い日差しを避けるため江の島に渡る橋の下で2時間ほど頑張り、食事休憩ののち知人の別荘マンションに立ち寄るなど十分な収穫がありました。

総会が終わる頃は海の色が澄んで来ますので絵道具持参で三浦半島南端に近い剣崎付近を徘徊します。作品は市内で展示しますのでご覧下さい。(塩見)

8月の定例連絡会は第3土曜日が盂蘭盆にあたるため休会とします。連絡は下記へお願いします。

記

連絡先 宮 ☎ 391-7542
塩見 ☎ 395-3718

郷土史の会

第8回同好会をニュース15号、16号でお知らせ致しましたとおり7月18日(土)13時30分～16時、東村山ふるさと歴史館視聴覚室で講師に東村山市教育委員会生涯学習部ふるさと歴史館学芸員、小川直裕氏をお招きし「考古学から分かる東村山の歴史」ー下宅部遺跡の成果を中心としてーの演題でスライドもまじえてご講演頂きました。考古学とは、から説きおこして現在発掘中の下宅部遺跡を中心として時代順に遺跡遺物そして東山道武蔵路等について詳細ご説明頂き、我が街東村山周辺の原始時代(縄文時代)古代史について、そしてその時代人の生活様式の想定、理解を深めることが出来ました。小川直裕氏にあらためて御厚礼申し上げます。

なお当同好会は今年は今回をふくめて計4回(通算8回)開催致しましたが、8月9月は夏休みとし、そのあと11月の総会の準備等の為、次回は年明けと致します。

代表幹事 三宅 良太

麻雀同好会

第7回麻雀大会のご案内

先に次回麻雀大会は9月20日(日)と予定しましたが、小野、田口共に都合が悪くなり翌週の9月27日(日)に変更させていただきます。

今期最後の大会となりますので、皆さん奮ってご参加ください。

なお、現在までの今期大会での成績は田口が記録していますが、一寸ご披露しますと

1位 三宅氏、2位 大西氏、3位 小野氏となっています。

記

日時: 9月27日(日)12時30分

場所: マージャンM

会費: 6千円

申込締切: 9月20日

申込先: 小野(391-9523)

田口(395-4077)

テニス同好会

7月25日に第2回の練習会を予定していましたが生憎の雨のため中止となりました。会員の気持ちを察して当間幹事をご自宅で盛大なバーベキュー大会を開いてくれました。奥様と二人の美人のお嬢さま(大学4年・1年)がいろいろと準備をしてくださり、とりたてのトマト、キュウリ等の野菜やお肉・飲物が沢山用意され食べながら飲みながら夏の夜のひとときを楽しく過ごすことができました。当間家のおじいちゃん・おばあちゃんも参加してくださり貴重なお話を伺うことが出来ました。テニス同好会に入会しますとまたこのような機会もあると思いますので皆さん是非ご入会ください。

参加者 木谷夫妻、三宅夫妻、山下夫妻
町田夫妻、長井、小亀、当間家五人
(小亀 記)

次回練習会を下記の通り行いますので、多くの皆様のご参加をお待ちしています。

期日 8月29日(土)

雨の場合8月30日(日)に順延
集合 午前 9時30分 東村山駅東口
(あさひ銀行所沢テニスコートを使用)

参加ご希望の方はご連絡ください。

幹事 当間 (391-6023)

ゴルフ同好会

○ 夏休みゴルフ戦記 (8月4日 於鳴沢GC)

どっしりとした夏富士をバックに、白樺の白い幹を織り込んだ赤松の林が両側に続き、広々とした緑の絨毯の先に立つ旗竿。

満点の舞台に立った稲門会の4人衆は、大西さん、佐藤さんの理工組と、木谷さん、井垣の商組の奇しくも学部対決で幕開け。

標高千百米の風は、爽やかにして優しく飛距離も出る筈が、乱戦・混戦・・・

結果は、ネットで1打リードしていた最終ホールで、理工組(特に名を秘す)が突然のにわか雨に手元が狂い、グリーン手前で池ボチャ3連発。商学部の勝利でチョン。

19番ホールでは、佐藤さんのセカンドライフ論をじっくり拝聴。大西さんが年金の仕組みを熱心に質問するなど高原ゴルフは現実世界と渾然一体の様相で閉幕・・・

以上(井垣 記)

○ 第4回秋期コンペ開催日決定

秋はすぐそこ。春の雪辱に燃えて磨きを掛けてきた皆さん。下記の日程で開催が確定しました。詳しくは9月号ニュースで。

記

期 日 平成10年10月17日(土)

場 所 こだまゴルフクラブ

埼玉県児玉郡児玉町

費 用 参加費 3,000 円

プレー費 28,500 円(食費別)

(更に2千円値引き方法有り)

幹事役 吉本 正典 392-1546

戸田 志郎 391-3467

知っ得ゴルフ

5番ホール - 6インチブレースー

「キャディさん、ここは6インチ(15センチ以内)オーケー？」とスタート前に必ず確かめるあなた。あるがままの状態プレーするというゴルフの基本原則をお忘れでは？一流コースでは三流プレーヤーと見られますよ。

芝の保護という名目で、ローカルルールとして認めているコースもありますが、自分のコース状態が良くありませんと白状しているようなものです。だって最良の状態の場所を

探してブレース(リブレースは元の場所に置き直すこと)して、またザックリと削り取られちゃ「負の連鎖」そのものです。

前へ動かすのはもってのほか。

『その程度のテクニックじゃ、タマを動かしたり、浮かしてみても、気休めに過ぎないのよ お客さん。』

編集後記

早いもので本紙も17号発行を迎え、11月の総会の時は20号を会場で配れるかなどと思案をしているところです。

12号発行までは、1頁の会からのおしらせは大西会長のワープロ処理の原稿を再度打直す二重手間をするなど試行錯誤がありましたが現在は、2頁以降の同好会活動報告他が充実してまいりましたので、1頁目は原稿即コピー原紙とする了解を会長からいただき大へん機能的となりました。

そのために、1頁目の会務関連の原稿を会長と編集に同時に送っていただく必要が無くなったことを広くお知らせ致します。

同好会に文芸部(仮称)を新設する呼び水に自作の俳句・短歌を本紙4頁の投稿欄に載せました。

当会の会員活動アンケートの結果から、同好の士が呼びかけ合って既に8クラブが活動を始めております。(今月号に活動報告が掲載されております5クラブのほかにウォーキング、音楽、園芸の3クラブがあります。)

俳句・短歌・短文などについては「そのうち声がかかる」と心待ちにしておりましたが、キッカケが掴みにくいためか大分時間が経過しました。私自身工科系の人間でありますので文芸方面は苦手でありましたが、約半世紀の長きに亘り絵画を嗜んでおり画題のつけ方ひとつで作品を殺すような苦い経験もありました。これではいけないと言うことで俳句・短歌の真似ごとを始めて文字に親しみ、現在に到っております。

同好の方はご意見・ご希望を下記へお寄せ下さい。お待ちしております。

(市内 恩多町4-2-67 塩見之一 ☎395 3718)

道覆う 甘き香りの 栗の花 異性を感じ 厭う乙女
敗戦の 無電を傍受 不発弾 叩き自爆す 戦友哀し
長男の 電話成田で 慌わただし 着きしか 発つか 急ぎ 確かむ

蛙道の 幅を狭める 虎が雨
湯畑に 紫蘭媼の 如く立ち
蟬穴を 隠しはくれん 降り積みて

稲門俳壇・歌壇

Y・S 生

1998年定時商議員会 総長学事報告(概要)

皆さまこんにちは。

1997年度の学事報告に先立ちまして、先日の総長選挙において再選されたことをご報告申し上げ、皆様方にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

これまでの3年半、私は総長として全力を尽くしたつもりですが、たいした実績をあげることにはできませんでした。しかし、桃栗三年、柿八年の喩もあるごとく、就任後3年たったところで、早稲田大学の行方に少し明るい兆しが出てきたように感じております。本日は、昨年度の学事報告とともに、在任中に取り組んできた課題全体について振り返ってみたいと思っています。

1994年11月、総長に就任した直後に組織した理事会において、私たちは「グローバル・ユニバーシティの実現」というテーマのもとで、4年間で取り組む目標を決定しました。それはまず第1に、他大学と比べて若干停滞気味の感のする研究教育について突破口を開くことであり、第2に21世紀に向かって学園全体の情報化に取り組むことであり、第3に21世紀の少子化・高齢化社会に向けて大学全体を生涯教育の場にすることであり、さらには、第4に経営について透明化を図ると同時に、第5にそれを支える財政基盤の健全化を掲げて、改革に取り組んできました。いずれも、大きなテーマであり、ただちに実現ができるものではありません。しかし、9年後の2007年に迎える創立125周年に向かって、早稲田大学が世界の大学のひとつとして、独自性を持ち、ブリリアントな存在を誇れる大学となるために、日夜努力してきました。その成果につきまして、主要な点についてのみ以下でお話したいと思います。

早稲田大学は、国内においては、日本大学に次いで第二の規模を誇っています。単に図体が大きいだけでは、なんの自慢にもなりません。いまはその内容が問われる世の中になっています。高度成長期には、質よりも量といわんばかりの施策が、どの大学においても採られました。しかし、現在は、少子化、高齢化社会に向って質が問われる時代になっていますし、世界を意識した大学の研究教育のあり方を考えなければいけない時代になってきています。とりわけ、大学の研究教育の質をどうしていくかが、問題となってきたわけです。理事会としては、既存の学部、あるいは、大学院の充実に努めると同時に、21世紀に向けて研究教育の突破口を作りたいとの思いから、「アジア太平洋研究センター」とそれにもとづく「アジア太平洋研究科」という新しい独立大学院の設置を目指したわけです。そのため、既存のシステム科学研究所と社会科学研究所を土台に、それらを再編し、内容を拡充していく方向で新しいセンターをつくと同時に、独立大学院をつくったのです。この大学院は一学年の定員が200人で、日本では社会科学系の大学院としては最大規模の大学院です。これまでのところ、社会科学系大学院で、一学年100人を超える大学院は我が国には存在していません。規模が大きい上に、外国人留学生を全学生中で半数

くらい迎え入れようという非常に野心的な試みであり、全国から注目を受けていました。幸いに、皆様方のご支援もあって、200人の定員に対して、初年度から700人を超える応募者があり、しかも、その半数が外国人であったということで、まずは順調なスタートを切ることができました。この大学院では、学生も先生方もたいへん張り切っていますので、あと10年もすると、アジア太平洋地域において、かなり華々しい存在になるものと確信している次第です。これからこの大学院は、日本の地理的な位置を活かしながら、これからの時代における世界のアジア太平洋に対するゲートウェイになるとの心意気で進んでいきたいと考えています。また、この新しい大学院が实际的に機能していくためには、アジア太平洋地域における有力大学と協力関係を持たなければいけないと考え、アジア地域の有力大学と積極的に協定を結びました。この3年間で新たに50校近くの大学と協力関係を作ることができ、アジア太平洋研究科のバックグラウンドが整いつつあります。

これからは、この大学院を中心にして、アジア太平洋地域における新たなヒューマンネットワークを構築していきます。同時に、早稲田大学全体の情報化を進めていく中で、この6月1日に発足した「国際情報通信研究センター」に、できれば2年後くらいを目標にアジア太平洋地域の学・産・官界から1学年200人を迎え入れる総合的な情報系大学院を設置したいと考えています。これが実現すれば、ヒューマンネットワークに、いずれ、メディアネットワークを重ね合わせた早稲田大学の濃密なネットワークをこの地域に築き上げることができるのではないかと考えています。

全学の情報インフラの整備につきましては、厳しい財政状況の中で、最大限努力をしてきました。「情報化3か年計画」の完成年度、つまり明年度中には、5万人の学生と教職員すべてがインターネットを利用するためのメール・アドレスを持ち、すべての教職員が全世界に向けて情報を発信・受信できる情報環境が整っていくことになっています。これはまた、生涯学習のシステムともいずればリンクさせようと考えています。このシステムが完成すれば、学生たちは大学が付与したメール・アドレスを生涯にわたって利用することができるようになります。そうすれば、図書館にあるデータベース化された書誌情報はじめ、校友は大学の持っている膨大な情報を生涯にわたって利用することができるようになります。このように、情報インフラの整備に努めてきました。

そして、見える形としては、北門の横にある黄色いビルを47億円かけて買収しました。このビルには、「早稲田大学インターナショナル・センター」という名称を付け、国際関係の部署を集中させましたが、このビルの1階では、新たな試みとして、学生達が24時間コンピューターに向かって学習することができる施設を発足させました。お帰りの際に、ちょっと覗いてみてください。こういう形で、学生に対する研究教育の環境条件を整備しつつあることを報告申し上げたいと思います。

さらに、キャンパスの整備におきましては、これまでA棟とよばれていた14号館が竣工しました。この会場へいらっしゃる途中に、大きなビルが建っていることに気付いた方も多いと思います。このビルは、これまでの研究教育条件のあり方を一変させるほど大き

なインパクトを持っています。このビルには、ソニーからたくさん的高額かつ高性能の機器をご寄付いただき、きわめて先端的な設備が施されています。このビルが完成したことによって、これからの研究教育環境は、かくあるべしとの思いを全学が共有することができました。全館使用は9月からなので、皆様方に全部を見ていただくことはできませんが、途中の階までは使っておりますので、時間のある方は是非ともあのエスカレーターに乗られまして、21世紀の早稲田大学の研究教育環境を実感していただければと思っています。

14号館の竣工に続いて、法学部のある建物を再建しB棟を、その次には、商学部のある建物のところにC棟と呼んでいる大きなビルを建てることになります。これらの計画は、新しい研究教育環境を作るために必要な設備投資であるという全学的な合意にもとづいており、今後とも推進していきたいと考えています。

ところで、これから、全学的な「第二次大学改革」が始まろうとしています。内容については、ここではまだ、お話しできる段階ではありませんが、きわめて近い将来、おそらくここ1、2年の内に早稲田大学全体が燃えてくるであろうことを、皆様方にはお約束しておきたいと思っています。それほど大きな改革です。ようやく早稲田丸という巨艦も21世紀へ大きく舵を切ることができそうだとの確信をもてそうになりました。

私の総長就任時には、在任中の4年間で大学は1千億円の借金を抱えて、財政破綻に至るであろうと予言した方々がいらっしゃいました。実際そのような状況になってもおかしくないほど財政的には危機的な状況にありました。就任した時点では、390億円あった借金が、この3年半でも、当時の計画よりもはるかに多くの計画を実現したにもかかわらず、借入金50億円減少することができました。このことによって、どうにか財政健全化の見通しを確信することができるようになったのです。

しかし、今なんとしても、頑張らなければいけないことは、30年にわたって早稲田大学に取り付いていた寄生虫、革マル派を大学から追い出すことです。この4年間、徒労に近い努力の繰り返しでしたが、幸いなことに、なんとか駆除できる可能性も見えてきています。寄生虫ですから、取り付いているだけでなく、大学の乏しい財源の中から、かなりの額を懐に取り込んでいましたが、そのほとんどを停止させることに成功したと思っています。これで、ようやく早稲田本来のアイデンティティである「自由」を回復することができたのではないかと考えています。

昨年5月から、大学キャンパスを開放するようになりました。それとともに、早稲田大学の建学の志の宣言「教旨」の碑である「建学の碑」を正門の前に移し替えしました。日々それを目にすることによって、大学の進むべき方向を確認しながら、改めて、早稲田本来の自由、自治、あるいは、久遠の理想に向かった歩みを始めたいと考えています。かつての早稲田大学は日本における学生文化の発信基地でありましたが、この30年間、早稲田大学が文化の香りのするものを発信することはきわめて稀れとなり、たいへん悔しい思いをいたしてきました。しかし、「會津八一記念博物館」といった早稲田文化を目に見える形で象徴するモニュメントを設けたように、私たちはもう一度、早稲田文化を全国に、あるいは世界に発信できる大学に生まれ変わるための努力をしていきたいと考えています。

そして、そのことは同時に校友の皆様方のこれからの21世紀における、人生80年、90年という時代に対応する大学のあり方を模索することでもあります。「心の故郷」と歌われながら、最近までの早稲田大学は、遠くにありて頼りにされていたかという決してそうではなく、叱責ばかりされるような状態であったと思います。しかしこれからは、皆様が早稲田大学にお見えになると、もう一度青春を謳歌してみたいと血が騒ぐようなキャンパスに変えていきたいと考えています。そのために、この博物館を中心に文化の香りが漂うキャンパスを取り戻すための努力を続けています。生涯学習といわれる時代、つまり、一つの人生は終わったが、もう一回新しい人生に挑戦することのできるような時代にあつて、大学がそれに対応する情報を提供できる、あるいは、大学のシステムの中で皆様方に勉強していただける「校友の生涯学習共同体」というものを構築したいと考えています。そして、これからの4年間は、特にその点にウェートを置きながら改革に取り組みたいと思います。今でも建物は残っていますが、かつて、大隈講堂の横に早稲田ゼミナールという予備校がありました。大学の側に予備校があること自体、非常にみっともなかったものですが、今度は、そのような建物を活用しながら大々的にエクステンション事業、つまり生涯学習事業に取り組んでいこうと計画しています。これからの4年間は、早稲田大学がどのように21世紀をサバイバルしていくかということや、校友の皆様方を含めた早稲田共同体を構成する方々が楽しく生きがいのある人生を設計することができるようにするためには、大学がどのような役割を果たしていくべきかについて考えながら、大学運営にあたりたいと思っています。

最後になりましたが、早稲田大学の本来のあり方に立ち戻るという意味において、私は3つの点でこれからの大学の方向づけを行いたいと考えています。一つは、早稲田から自由という観念を、自由というものの本家本元としての早稲田大学のあり方を社会的にアピールしていきたい。そして、その自由のもとに、学問と教育が花を咲かせる環境を作っていきたい。そして、そこで育った学生たちを世界に雄飛させていきたい。これら、自由、学問、世界のキーワードをこれからの大学の方向づけとして掲げながら、改革を続けていきたいと考えていますので、今後とも皆様方の絶大なるご支援の程をお願い申し上げます。簡単ですが、学事報告に替えさせていただきます。

ありがとうございました。